

中期目標	短期目標	実施した取組	評価の視点	評価の材料		結果と考察	短期目標に対する評価	中期目標に対する評価
				内容				
(1)大台ヶ原を特徴づける森林生態系の保全	①緊急に保全が必要な箇所における対策の強化-生物多様性の保全- 【資料1_3-1-1】	・大規模防鹿柵(東大台、西大台) ・多様性防鹿柵(西大台) ・小規模防鹿柵(バッチディフェンス)(西大台5地点、12基) ・剥皮防止用ネットの設置(東大台)	・樹木の剥皮の有無 ・ニホンジカによる食痕の有無 ・下層植生の変化 ・ササ類の被度・稈高の変化 ・草本層、低木層の回復状況 ・実生の生存率 ・植物の確認種数の増加	植生タイプ別調査	毎木調査	・防鹿柵内ではニホンジカによる剥皮は見られなかった。 ・平成20年~25年にかけての樹木の生存率はブナースズタケ密植生をのぞいては、防鹿柵内の方が高かった。	防鹿柵の設置により、「緊急に保全が必要な箇所における対策の強化-生物多様性の保全-」は達成している。 防鹿柵内の樹木に新たなニホンジカによる剥皮は見られておらず、緊急に保全が必要な箇所へのニホンジカの侵入を防ぐ目的は達成している。 これに伴い、植生については、西大台のブナースズタケ疎型植生や沢沿いに設置した防鹿柵において下層植生の植生率や植物確認種数の増加が見られるなど、植生に対する緊急的な保全対策の効果は見られた。	防鹿柵の設置や利用調整の効果的な運用により、「大台ヶ原を特徴付ける森林生態系の保全」という中期目標に向けての具体的な取組の実施は一定の効果を上げていると考えられる。 今後の課題として、防鹿柵の設置により、ミヤコザサが繁茂することに伴い、樹木実生の発芽数、生存率の低下による森林更新に関する問題が生じることがあげられる。 スズタケ等、下層植生の回復に伴うコマドリの生息動向を把握する等、森林生態系の保全が図られているか注目していく必要がある。 また、大台ヶ原全体における利用者の踏み込み等による森林生態系への負荷について把握し、今後の保全に向けた取組についての検討や対策の実施があげられる。
				小規模防鹿柵調査(西大台)	植生調査	・西大台のギャップ地に設置した小規模防鹿柵内では草本層、低木層の植生率の回復が見られ、柵の設置後5年で広葉樹の稚樹が低木層を形成するようになった。		
					稚樹調査	・西大台のギャップ地に設置した小規模防鹿柵内では柵外に比べて実生の生存率が高くなった。		
				多様性防鹿柵調査	下層植生調査	・沢沿いの明るい環境に設置した多様性防鹿柵内ではコチャルメルソウなど湿生植物の被度が増加した。		
				防鹿柵内植物相調査		・植生タイプ別の防鹿柵や、多様性防鹿柵内では柵の設置後5年程度経過すると、確認種数が増加した。増加した種の中には重要種も含まれていた。 ・防鹿柵内では国外外来種はほとんど確認されていない。		

中期目標	短期目標	実施した取組	評価の視点	評価の材料	結果と考察		短期目標に対する評価	中期目標に対する評価		
					内容					
(1)大台ヶ原を特徴づける森林生態系の保全(つづき)	①緊急に保全が必要な箇所における対策の強化-生物多様性の保全-(つづき) 【資料1_3-1-2】	・大規模防鹿柵(東大台、西大台) ・多様性防鹿柵(西大台) ・小規模防鹿柵(バッテディフェンス)(西大台5地点、12基) ・剥皮防止用ネットの設置(東大台)(つづき)	植生タイプ別の動物相の変化	植生タイプ別調査(平成24年度より環境指標種調査)	地表性小型哺乳類	・第1期と第2期の結果を比較すると、防鹿柵外では出現種数、わな当たりの捕獲数が減少する傾向が見られた。一方で、防鹿柵内ではそうした傾向が示されず、特に植生タイプIV(トウヒコケ密)ではヒミズ、スミスネズミ、アカネズミ、ヒメネズミといった種が継続的に生息確認されるなど、地表性小型哺乳類の種構成と生息密度が保たれていると考えられた。こうしたことから、防鹿柵は地表性小型哺乳類の保全に効果を示したと考えられた。	動物群集についても、防鹿柵内におけるササ類の成長等、下層植生の変化に伴い、鳥類では出現個体数の増加傾向が見られ、これまで確認できなかったウグイス類が出現したり、地表性甲虫類のオオクロナガオサムシの増加が見られた。 また東大台の特徴的な植生であるトウヒコケ密植生ではネズミ類の種構成と生息密度が保たれているなど、生物多様性の保全の効果が見られた。			
					鳥類	・防鹿柵の設置に伴い、ニホンジカによる下層植生への食圧が抑制され、ササ類の稈高が高くなるなどの植生変化が確認されるようになり、区画センサスの結果からは、防鹿柵内で鳥類の出現個体数の増加傾向が見られた。また、このような場所ではこれまで確認できなかったウグイスが出現するようになった。防鹿柵設置によるササ類の成長等の下層植生の変化は、鳥類の出現個体数の増加や、ウグイスの出現増加に効果を示したと考えられた。				
					昆虫類等	地表性甲虫類				・西大台の防鹿柵内のスズタケ林床では、ニホンジカの採食がなくなったため、下層植生が増加し、落葉層の安定化が起きたと考えられる。それが餌の増加につながり、オオクロナガオサムシが増加した可能性が考えられる。オオクロナガオサムシの増加のメカニズムについては検証の必要があるものの、防鹿柵設置により特定の種の増加につながったものと考えられる。
						大型土壌動物				・防鹿柵内では下層植生の発達に伴い落葉・落枝の量が増加するとともに移動が抑制され、その結果、落葉・落枝が安定化し、間隙の多い土壌構造が回復すると考えられるが、柵内において土壌動物の多様性が高いことはその結果を示しているものと考えられた。反対に柵外では土壌動物の多様性の低下が進行していると考えられる調査区も認められた。なお、西大台のタイプVII(ブナースズタケ疎)では、土壌動物の柵内での回復は認められず、土壌動物の回復にはより長い時間が必要と考えられた。
						ガ類				・ガ類は種によって食餌となる寄主選択の幅が決まっており、その群集構成は植物の種多様性に影響を受けることが予測されるが、現在までの2回の調査では、防鹿柵設置による植生の変化に対応したと推測されるような顕著な変化は現れていない。
						食材性昆虫類				・今回の調査結果から食材性昆虫類は年次による種数、個体数の変動が大きいことが明らかとなった。このため、防鹿柵設置による効果を判断することはできなかった。
クモ類	・第1期の調査において、ミヤコザサの稈高の増大と一部の種の個体数の増加に関連が示唆された。防鹿柵の設置によりササ類が成長すると、クモ類の造網できる場所が物理的に増加すると考えられる。									

中期目標	短期目標	実施した取組	評価の視点	評価の材料		結果と考察	短期目標に対する評価	中期目標に対する評価
					内容			
(1)大台ヶ原を特徴づける森林生態系の保全(つづき)	②利用者のオーバーユースからの回避による森林生態系の保全(「新しい利用の在り方推進」による取組) 【資料1_3-2】	・利用調整地区の効果的な運用 ・歩道整備による歩行範囲の固定化 ・利用者マナー向上(西大台利用調整地区の運用に伴う事前レクチャーの実施)	歩道周辺の植生の回復状況 歩道周辺土壌硬度の変化 種組成の変化	植生調査		・土壌硬度については、全ての地点で歩道から5m以上離れた箇所では低くなっており、歩道外では踏み込み等の人為の影響はほとんどないといえる。 ・歩道周辺の土壌硬度は年々低下傾向にあり、平成19年度の利用調整地区運用前の過剰利用からは回復傾向にあるといえる。 ・歩道周辺では植生の悪化は特に見られなかった。これらのことから、歩道を固定化したことにより、歩道周辺の植生への負荷は軽減されていると判断された。	「利用者のオーバーユースからの回避による森林生態系の保全」は、西大台においては利用調整地区の効果的な運用により、概ね達成している。 歩道の固定化や利用者のマナー向上により、歩道周辺の植生では、踏圧等の負荷が軽減し、植生の悪化は特に見られなかった。 また、大台ヶ原全体における利用者の踏み込み等による森林生態系への負荷について把握し、今後の保全に向けた取組についての検討や対策の実施があげられる。	
			裸地の回復状況 踏み分け道の回復状況	植生回復調査		・ミヤコザサが繁茂している箇所や落葉が堆積している箇所では踏み分け道はわかりづらくなっている。このような箇所では人為的な負荷は軽減されていると判断された。 ・歩道周辺のミヤコザサや蘚苔類の繁茂している箇所では、ササや蘚苔類の回復が見られており、このような箇所では人為的な負荷は軽減されていると判断された。 ・しかしながら、流水や動物の採植などの影響により、いまだに踏み分け道や裸地からの回復が見られない箇所があることから、現状は過剰利用からの回復過程にあるものと考えられる。		
			国外外来種の種子の持ち込み状況	種子持ち込み調査		・利用調整地区入口に設置してあるマットから回収された泥や利用者の靴底から収集した泥を播き出した結果、国外外来種の発芽は確認されなかった。 ・植生調査を実施している地点では国外外来種についてはナゴヤ谷でコヌカグサが確認されているのみであり、利用調整地区制度の運用後、新たな国外外来種は確認されていない。		
			人の踏み荒らし、盗採などによる希少植物への人為的影響の把握	希少植物調査		・人の踏み込みなどによる希少植物への影響は確認されていない。 ・盗採とみられる希少植物の減少が確認されていることから、希少植物への人為的影響(盗採)は軽減されていないと判断された。		
			歩道外の蘚苔類の被度の回復状況 踏圧や洗掘などによる蘚苔類への人為的影響の把握	蘚苔類被度調査		・歩道周辺などにおいて、人の踏圧などによる蘚苔類への影響は確認されなかったことから、人為的な負荷は軽減されていると判断された。 ・しかしながら、過去の人為の影響と考えられる歩道の掘削箇所への流水の影響による蘚苔類被度の減少が確認されていることから、現状は過剰利用からの回復過程にあるものと考えられる。		

中期目標	短期目標	実施した取組	評価の視点	評価の材料		結果と考察	短期目標に対する評価	中期目標に対する評価
				内容				
(2) 森林の更新環境の回復	① 過剰な動物の影響や菌害の抑制による実生の成長促進【資料1_3-3】	<ul style="list-style-type: none"> ・防鹿柵(下層植生後継樹保護) ・小規模防鹿柵(バッチディフェンス)(東大台7基、西大台5地点・12基) ・自生稚樹の保護(自生稚樹保護手法の検討、防鹿柵No.55(下層植生後継樹保護)) ・防鹿柵内における小動物の個体数増加抑制(No.17,22防鹿柵へのキツネの出入り口設置) ・表層土除去による菌害の除去(実証実験区(表層土除去区)の設置) ・ニホンジカ個体数調整 	実生・後継樹の成長	植生タイプ別調査	下層植生調査	<ul style="list-style-type: none"> ・ササ類の被度が低い場所(トウヒコケ型植生、トウヒコケ密型植生、ブナスズタケ型植生)の防鹿柵内では、柵の設置から8年目には樹高30cm以上の林冠構成種の実生が見られるようになった。 ・ササ類の被度が高い箇所(ミヤコザサ型植生、トウヒミヤコザサ型植生、ブナミヤコザサ型植生、ブナスズタケ密型植生)では実生の出現回数が低く、樹高30cmを超えて成長する稚樹も少なかった。 ・ミヤコザサ型植生の柵内では出現回数は少ないものの、トウヒ、コバノトネリコなど50cmを超える稚樹が見られるようになった。 ・ミヤコザサ型植生のように、林冠が開けた明るい環境であれば、生き残った実生の成長は早いといえる。 	<p>過剰な動物の影響については防鹿柵の設置等により、ニホンジカによる被食の影響がなくなり、実生の定着や稚樹の成長を促進させることや草本層、低木層の植生率の回復が見られるなど短期目標は概ね達成されたといえる。</p> <p>正木峠周辺に生育するトウヒ等針葉樹の自生稚樹について、保護を行うために分布調査を実施し、単木保護柵を含めた防鹿柵の設置を行うなど具体的取り組みに取りかかり始めたところである。</p> <p>また、菌害の抑制に着目した実生の定着環境については、実証実験により、表層土除去がトウヒ種子の病害を抑制する効果があることが確認され、第1期評価時にその実施可能性についての検討を行ったが、その後、具体的な取り組みの実施には至っていない。</p>	<p>防鹿柵の設置等により、森林の更新環境の回復は、実生の定着や稚樹の成長が促進されており、「森林の更新環境の回復」という中期目標に向けた具体的な取組については一定の効果を上げていると考えられる。</p> <p>今後の課題としては、正木峠周辺に生育する自生稚樹の保護を継続的に進めていくとともに、実生の定着や成長など、森林の更新環境の回復に向けて効果があることが明らかとなった手法を活かした具体的な取組内容を検討し、実行に移すことがあげられる。</p>
			自生稚樹の生存率	自生稚樹生育追跡調査	生残数調査	<ul style="list-style-type: none"> ・正木峠の防鹿柵内外においてトウヒ自生稚樹の枯死率を調査した結果、柵外の稚樹の方が枯死率が高く、また樹高が低かった。柵外の稚樹のほとんどにニホンジカのもとの推察される食痕が確認されたことから、枯死の主な要因はニホンジカの採食によるものと考えられた。 		
			針葉樹の後継樹の成長	小規模防鹿柵調査(東大台)	稚樹調査	<ul style="list-style-type: none"> ・防鹿柵設置後6年で樹高30cm以上の林冠構成種針葉樹の稚樹の個体数が増加し、最大では樹高200cmを超える稚樹も見られるようになった。 ・防鹿柵外の自生稚樹については、ニホンジカによる被食によりほとんど成長しておらず、枯死個体も確認された。 		
			林冠構成種の後継樹の成長	小規模防鹿柵調査(西大台)	稚樹生育状況調査	<ul style="list-style-type: none"> ・西大台のギャップ地に設置した小規模防鹿柵内では柵外に比べて実生の生存率が高かった(再掲)。 ・柵の設置後5年で樹高200cmを超える林冠構成種の稚樹が見られるようになった。 		
			植生の回復状況 草本層～低木層の変化		植生調査	<ul style="list-style-type: none"> ・西大台のギャップ地に設置した小規模防鹿柵内では草本層、低木層の植生率の回復が見られ、柵の設置後5年で広葉樹の稚樹が低木層を形成するようになった。 		
			保護が必要な自生稚樹の選定	自生稚樹分布調査	自生稚樹生育状況調査	<ul style="list-style-type: none"> ・正木峠～正木ヶ原のミヤコザサ草地において保護が必要な自生稚樹の分布調査を実施し、872個体の自生稚樹のマーキングを行った。 ・マーキングをした自生稚樹のうち108本について保護前の生育状況を調査した結果、樹高40～70cmの個体が多く、樹高の高いものほどシカの被害を受けているものが多い傾向があった。このことから周囲のミヤコザサの稈高を超える個体ほどシカの被害を受けやすいものと考えられた。 		
			ウサギやネズミなどの小動物を捕食するキツネなどの動物が防鹿柵内に侵入しているかどうかを判断する。	自動写真撮影		<ul style="list-style-type: none"> 大型防鹿柵内にキツネを想定とした出入り口を設けたところ、柵内にキツネが入っていることが自動写真撮影によって確認された。イノシシ、シカなど柵内の植生に影響を与える大型哺乳類の柵内への侵入は確認されていない。 		
			地表処理によるトウヒ種子への病原菌の感染抑制効果	実証実験調査	菌害調査	<ul style="list-style-type: none"> ミヤコザサ草地において表層土除去を行った実験区ではトウヒの種子からの病原菌の分離率が低かったことから、表層土除去はトウヒ種子の病原菌への感染を抑制する効果があることがわかった。 		

中期目標	短期目標	実施した取組	評価の視点	評価の材料		結果と考察	短期目標に対する評価	中期目標に対する評価			
				内容							
(2) 森林の更新環境の回復(つづき)	② 林床のミヤコザサの抑制【資料1_3-4】	大規模ササ刈り(正木峠、三津河落山に約1haの実験)	樹木実生の定着状況 ミヤコザサの衰退状況	大規模ササ刈り調査	下層植生調査	<p>・1ha以上の大規模ササ刈りを年1回・3年継続した結果、防鹿柵内ではミヤコザサの被度はほとんど変化がないか、増加しており、稈高についても1年目のササ刈り以降は徐々に回復している。</p> <p>・防鹿柵外では被度、稈高ともに減少傾向にあり、ミヤコザサは徐々に衰退しているといえる。</p> <p>・大規模ササ刈りによる斜面下部への土壌流出状況の調査を行ったところ、土壌流出はほとんど生じていないことがわかった。</p>	大規模ササ刈りによる林床のミヤコザサの抑制については、防鹿柵内では抑制効果がほとんどなく、防鹿柵外はニホンジカの採食と併せて、林床のミヤコザサの被度や高さを抑制できることが明らかとなったが、実生の発芽促進、定着、成長については現時点では効果を検証するまでには至らなかった。	なお、大規模ササ刈りによる土壌流出の影響はほとんどないものと判断された。			
				実証実験調査					<p>・ミヤコザサ型植生の表層土除去区、ササ刈り区、トウヒ・ミヤコザサ型植生の地掻き区、ササ刈り区ではトウヒの発芽、定着が確認されたことから、亜高山性針葉樹林のミヤコザサが地表を覆っている場所では表層土除去や地掻き、ササ刈りといった地表処理は林冠構成種の実生の発芽、定着に効果があることが明らかとなった。</p> <p>・同様に、ミヤコザサが地表を覆っているブナ林についても、地掻き区、ササ刈り区といった地表処理区では実生の個体数が多く確認されたことから、地掻き、ササ刈りといった地表処理は林冠構成種の実生の発芽、定着に効果があることが明らかとなった。</p>	<p>実生の定着環境等森林更新に必要な適正な林床環境の明確化については、トウヒ等針葉樹の倒木、根株上における実生の発生条件や植生タイプごとに実施した実証実験により、表層土除去や地掻き、ササ刈りといった地表処理が林冠構成種の実生の発芽、定着に一定の効果があることが明らかとなった。</p> <p>ただし、森林の更新環境の回復のために、これらの得られた結果について、具体的な取組に活かすところまでには至っていない。</p>	
(3) 森林後退の抑制	① 森林後退の場所における樹木減少の抑制【資料1_3-6】	<p>・防鹿柵</p> <p>・剥皮防止用ネットの設置(東大台)</p> <p>・小規模防鹿柵(正木峠南西部の谷筋の疎林部に3基設置)</p> <p>・防鹿柵内自生稚樹の坪刈実験(正木峠防鹿柵No.5内(木佐貫先生))</p> <p>・ニホンジカ個体数調整</p>	ニホンジカによる剥皮による枯損木の変化 剥皮防止用ネット設置による藓苔類等への影響	剥皮度調査 対策地におけるギャップ図		<p>・剥皮防止用ネットを設置した樹木は剥皮度の上昇が見られなかったことから、剥皮防止用ネットの設置はシカによる剥皮からの保護効果があると判断された。(H20 推進計画P39)</p> <p>・樹脂製の剥皮防止用ネットによる藓苔類の生育影響の評価については現在解析中である。</p>	剥皮防止用ネットの設置により、森林後退の場所における樹木の減少の抑制を図ることができている。	剥皮防止用ネットの設置や自生稚樹の保護により、樹木の減少の抑制や森林更新の場の確保が図られ、「森林後退の抑制」という中期目標に向けた具体的な取組は一定の効果を上げていると考えられる。			
			針葉樹の後継樹の成長	小規模防鹿柵調査(東大台)	稚樹調査				<p>・東大台の疎林部に設置した小規模防鹿柵内では、設置後6年で樹高100cmを超える稚樹の個体数も増加し、最大では樹高140cmを超える稚樹も見られるようになった。</p> <p>・防鹿柵内では樹高30cmを超える稚樹の個体数も年々増加している。</p>	<p>小規模防鹿柵の設置や防鹿柵内における坪刈りにより、森林後退の場所に生育する自生稚樹の育成が可能であることが明らかとなった。</p> <p>これらのことから、森林後退の場所における樹木減少を抑制する手法、方針については概ね確定することができた。</p>	<p>今後の課題として、剥皮防止用ネットの設置や自生稚樹の保護以外の手法として考えられていた森林更新の場の創出(倒木の設置等)について、トウヒ等針葉樹実生の生育環境について把握することができたことから、具体的な取組内容を検討し、実行に移すことがあげられる。</p>
			坪刈実施自生稚樹の生存率、成長	自生稚樹生育追跡調査					<p>・ササの坪刈りを実施した自生稚樹は生存率が高くなった。</p> <p>・坪刈りを実施した自生稚樹の伸長成長については坪刈り実施後の伸長成長パターンについては様々な傾向が見られた。</p>		

中期目標	短期目標	実施した取組	評価の視点	評価の材料		結果と考察	短期目標に対する評価	中期目標に対する評価
				内容				
(3) 森林後退の抑制(つづき)	② 森林後退の場所における森林更新の場の保全【資料1_3-7】	・防鹿柵 ・岩礫地等針葉樹の実生・稚樹の生育地に小規模防鹿柵を設置(正木峠南西部の谷筋の疎林部に3基設置)	針葉樹の実生の発生状況	小規模防鹿柵調査(東大台)	稚樹調査	・東大台の疎林部に設置した小規模防鹿柵内では、新規に樹高30cmを超える稚樹が毎回多数確認されることから、相当量の実生発生数があり、防鹿柵設置後実生の生存率が高まったと考えられる。	小規模防鹿柵を森林後退の場所の疎林地に設置することにより、自生稚樹の発生、成長が促進されることが明らかとなった。 このことから、森林後退の場所における森林更新の場の保全を行う手法、方針については概ね確定することができた。 また、倒木、根株に着目した保全対策についても検討を進めていく必要がある。	
		③ 森林後退の場所における森林更新の場の創出【資料1_3-8】	・植栽等による林縁の保護(トウヒ苗木の防鹿柵No.5、6への試験植栽)	移植苗木の生存率	試験植栽(防鹿柵No.5、No.6)	移植苗木モニタリング(試験植栽)	・平成22年秋季に試験植栽した苗木の植栽後1年目の生存率は38.3%であった。 ・生存率が芳しくなかった要因としては強風であられたこと、苗畑に密植されていた苗木を十分に発根させないまま植栽したことなどが考えられたことから、新たな手法による試験植栽を検討し、平成26年度以降に実施する予定。	
(4) ミヤコザサ草地から森林への遷移	① 森林の遷移に誘導するための手法の検討【資料1_3-9】	・トウヒ苗木の植栽(正木峠の防鹿柵内(S64~H15)、小中学生によるイベント植栽) ・自生稚樹の保護(小規模防鹿柵(正木峠南西部の谷筋のミヤコザサ草地に4基)、防鹿柵No.55、簡易保護柵)	針葉樹の後継樹の成長	移植苗木の生育追跡調査		・トウヒ苗木は正木峠のように明るい箇所に移植したものの生存率、成長率が良く、苔探勝路のように暗い環境に移植したものは生存率、成長率ともに悪い傾向があった。 ・正木峠に移植した苗木は平成23年度調査時点で平均樹高120~170cm程度であり、最大では樹高342cmまで成長した個体もあった。	小規模防鹿柵の設置により、自生稚樹の成長が促進されることが明らかとなった。 正木峠の防鹿柵内に植栽したトウヒ苗木については、順調に生育しており、森林への遷移を誘導する手法として有効と考えられたが遺伝的な多様性に配慮し、今後植栽を前提とした新たな苗木育成は行わないこととしている。 以上のことから、森林の遷移に誘導するための手法として、自生稚樹の保護は活用できる可能性が得られた。	小規模防鹿柵の設置は「ミヤコザサ草地から森林への遷移」に誘導するための初期段階として活用できる可能性が得られた。 今後、具体的取組として自生稚樹の保護を実施していくことにより、中期目標を達成できると考えられる。
				試験植栽(イベント植栽)	移植苗木モニタリング(イベント植栽)	・平成22年秋季にイベント植栽した苗木の植栽後1年目の生存率は33.9%であった。 ・生存率が芳しくなかった要因としては強風であられたこと、苗畑に密植されていた苗木を十分に発根させないまま植栽したことなどが考えられる。		
				小規模防鹿柵調査(東大台)	稚樹調査	・東大台のミヤコザサ草地に設置した小規模防鹿柵内では、防鹿柵設置後6年で樹高100cmを超える稚樹の個体数も増加し、最大では樹高200cmを超える稚樹も見られるようになった。 ・防鹿柵内では樹高30cmを超える稚樹の個体数も年々増加しているが、防鹿柵内のミヤコザサ稈高の増加に伴い、新規実生の発芽、定着が困難になることが予想される。 ・ササの稈高を超える稚樹は伸長成長が良くなる。		
		保護が必要な自生稚樹の選定	自生稚樹分布調査		正木峠南西部~正木ヶ原にかけて872本の針葉樹の自生稚樹を確認し、マーキングを行った。			